

# 『言語にとって美とはなにか』論

—マルクス、サルトルとの関連—

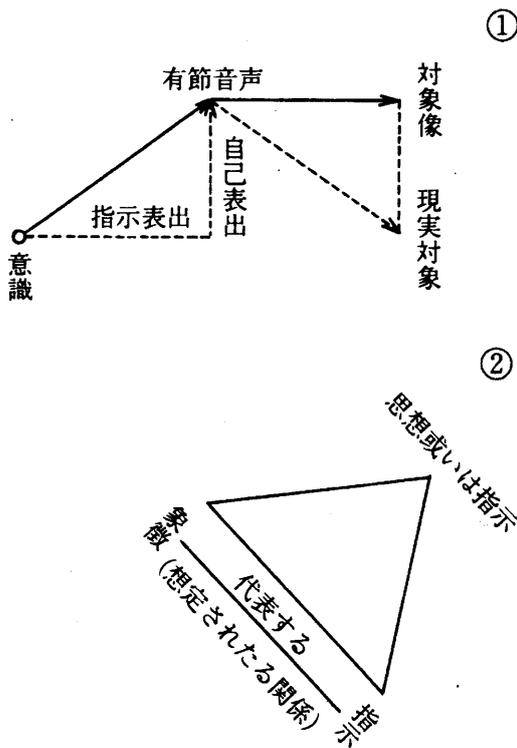
一

『言語にとって美とはなにか』<sup>(1)</sup>の主要なモチーフが、いわゆる反映論に立脚するマルクス主義にたいする批判とその克服であったことは言うまでもないが、同時に吉本隆明は、『言語にとって美とはなにか』の「序」のなかでヴァレリーの文学論に言及しながら、文学の理論とは個人的なものであるというヴァレリーの言葉を名言としつつも、そういう考え方は違った理論を創出しようとした、と述べている。つまり、文学についての個人的な理論ではなく普遍的な理論を、しかし、それは反映論とは異なった普遍的な理論の創出を、吉本隆明はめざしていたわけである。そのため、吉本隆明は、「文学は言語で創った芸術だ」という、誰にも認められる前提から出発するのだと語っている。反映論ではない、文学の普遍的な理論の創出は、した

がって、まずは言語の問題から出発することになる。

## 綾 目 広 治

吉本隆明の言語論の特徴は次の図①にあらわれている。



(オグデン／リチャーズ『意味の意味』) (2)

ポイントは「自己表出」にあるわけだが、それについて吉本隆明は、次のように述べている。

自己表出は現実的な与件にうながされた現実的な意識の体験が累積して、もはや意識の内部に幻想の可能性として想定できるにいたったもので、これが人間の言語の現実離脱の水準をきめるとともに、ある時代の言語の水準の上昇度をしめす尺度となることができる。

この「自己表出」によって、たとえば「眼前の海を直接的ではなく象徴的(記号的)に指示することとなる。」のであり、言い換えれば「言語は現実的な対象との一義的(eindeutig)な関係もたなくなった。」のである。つまり、この「表出された有節音声はある水準の類概念をあらわす」というわけである。

しかし、こういうことならば、吉本隆明も本書のなかで言及しているカッシーラーやランガー、あるいはオグデンとリチャーズの考え方とあまりかわりはない。実際、図①の右半分の三角形は、吉本隆明も本書の中で掲げている、オグデンとリチャーズの有名な図(図①の下の図②)。吉本隆明の図の右半分の三角形と対応させるために斜めに掲げた。)と重なる。吉本隆明の図示している「有節音声」が、オグデンとリチャーズの言う「象徴」に重なり、「有節音声」は直接「現実対象」に結びつくのではなく、対象像を経由していわば間接的に結びつくというのは、オグデンとリチャ

ーズの場合の、「象徴」が「思想或いは指示」を経由して「指示物」に結びつくという考え方と対応しているであろう。

もちろん、この有節音声を発するにいたった人間の意識のあり方を、「自己表出」と「指示表出」とのからみで説明しようとしたところ(図①の左半分の三角形)に、吉本隆明の独自性があるとも言えるが、ともかくも、この現実離脱の水準を示す「自己表出」の概念によって反映論をしりぞける言語論の展開が可能になったわけである。

吉本隆明は、「指示表出」が言語の意味に結びつくのに対して、この「自己表出」は言語の価値に結びつくとして、さらに「わたしが言語の価値を意識の自己表出からみられた言語の全体とかがえてきたものは、サルトルの「欠如を蒙る全体」にあたっている。」と述べている。改めて説明するまでもなく、サルトルは、「あるところのものである」即自存在に対して、対自存在を「あらぬところのものである」存在、あらぬところのものである「存在、すなわち、自己の存在を絶えず無化し超越していくもの」ととらえ、その点において、「あるところのものである」即自存在、つまり現実の中にはじめこまれ、決定論な世界の存在である即自存在とは異なって、自由な存在としての対自存在の価値をみた。

たしかにそう考えれば、吉本隆明の述べるように、自己

表出にもとづく、吉本隆明言うところの価値と、サルトルの述べる対自存在の価値とは、決定論的、あるいは反映論的な世界を超え出たという点において結びつくものと言える。ただ補足すると、サルトルが「欠如を蒙る全体」という場合の「全体」とは、即自と対自という本来は両立不可能な性格をあわせもつような存在のことで、それが超越者として実体化されると「神」と呼ばれるとサルトルは言っているが、<sup>(3)</sup>そうすると、吉本隆明の言う「言語の全体」という場合の「全体」とはまったく次元の違うもので、両者を無造作に対応させることはできないと思われる。

それはともかくも、反映論、決定論に対する批判は、個人、それぞれに異なった自己表出、あるいは独自の役企を、階級構造一般に還元してしまう考え方、つまりは、個を一般に解消してしまう考え方に對する批判につながってくる。この点においても吉本隆明とサルトルは共通している。吉本隆明はルカーチを批判して、「ルカーチなどが、 $\wedge$ 芸術 $\vee$ あるいは $\wedge$ 文学 $\vee$ というとき、一般性としての芸術、文学しか考えていない」と述べ、また「ある芸術、文学の $\wedge$ 作品 $\vee$ は、上部構造一般ではなく、個性的な具体的な表現である」とも述べている。一方、サルトルも、『方法の問題』でルカーチに代表されるマルクス主義者を同じように批判して、ルカーチはワイルドもブルーストもベルグソンもすべてプチブルという一般的な性格に解消してしま

う、と述べ、さらに、「思惟するとは、現代のマルクス主義者にとっては、全体化をめざすことであり、そしてこの口実の下に、特殊性を普遍的なものに置きかえてしまうことである」と語っている。<sup>(4)</sup>

このように、個を一般に解消するのではなく、また、精神や上部構造、そしてその歴史を、下部構造や社会経済史に還元するという発想を退ける点で、吉本隆明の考え方はサルトルの哲学と通じる。もちろん、それだけならば観念論一般とかわらないが、見落としてならないことは、個人自己表出、あるいはサルトル流に言えば自由な役企が、つねに状況との関係においてあるという考え方を、両者が持つていることである。この問題は、「言語にとって美とはなにか」では、個人々々（この場合は作家だが）の自己表出としての作品と状況との関わりを論じた「表現転移論」で扱われている。

## 二

「表現転移論」のモチーフは、次のように述べられている。

ひとつの作品から、作家の個性をとりのけ、環境や性格や生活をとりわけ、作品がうみ出された時代や社会をとりのけたうえで、作品の歴史を、その転移をかんがえることができるかという問題である。（略）この一見すると不可能なようにみえる問題は、ただ文学

作品を自己表出としての言語という面でもとりあげると  
きだけ可能なことをおしえていく。

しかしこの引用にあるように「作家の個性」や「環境」「性格」「生活」、そして「時代」「社会」をとりのけるというのには、言いすぎであつて、たとえば、言語の価値に触れた一節では、「各時代とともに連続的に転化する自己表出のなかから、おびただしく変化し、断続し、ゆれうごく現在のな社会と言語の指示性とのたたかみをみているとき、価値をみているのである。」というように、自己表出とそれに結びついた価値を、やはり社会や言語の指示性との関係において見ている。事実、表現転移論では、時代や社会の問題が作品を論じる場合に登場してくるのである。そのことは、「文学の変革は、必然的にある根源の現実意識によつて行つた。したがつて、現実社会のある基礎的な核の變化と対応している。」という言葉からも窺われよう。したがつて、「作家の個性」や「時代」「社会」などをとりのけるという言葉は、作品の問題を作家の問題に、文学の歴史を流派の歴史に置き換える考え方、そしてとくに、それらをすべて最終的には社会経済史に還元する考え方に對する反発のモチーフが、吉本隆明特有の強い言い方になつてあらわれた、というぐらゐに理解しておくべきだろう。

さて、社会状況と個々の作家の表出との関係は、四部に分れている表現転移論の中では、第一部の近代表出史論Ⅰ

では前面に出てこないが、近代表出史論Ⅱ（明治四十年代から大正にかけて）では、「おそらく日露戦争後の社会の膨化がこの時期の表現の特質をもつともつよくうらづけていく。」という観点から論じられ、現代表出史論（大正末から戦前昭和にかけて）では、「高度に画一化され、膨張した資本社会」に對して作家たちが表出においてどのような態度をとつたか、という観点から述べられている。現代表出史論では、この「資本社会」によつて強いられた「△私▽の解体」に對して、作家達は、事物の序列を並列化する方法、あるいは解体に直面した△私▽意識の内部を表出の對象とする方法を選んだとしていく。吉本隆明によれば、これらは、△私▽意識の解体を、表出空間を相対化しておし拡げた表出方法であるが、それに対し、戦後表出史論（昭和の戦後）では、「敗戦直後の社会的な虚相と混乱のなかで徹底的にしめした△私▽意識の崩壊」が、言語表現においては「△時間▽性のアモルフな拡張となつてあらわれた」。

このように見えてくると、吉本隆明が自己表出を軸とする文学を現実社会との関係において捉えていることがわかるが、もちろん、それは反映論ではない。たとえば現代表出史論では、「高度に画一化され膨張した資本社会」をそのまま文学が反映したと見るのではなく、その社会に對する「反応」、「抵抗」、「補償」として文学が成立したと見るのである。このことを吉本隆明は

還元 (reduzieren) にたいして創出 (produzieren) が芸術として言語の表出の性格に対応するものであり、これを△架橋▽するものが、わたしのいう自己表出にはかならないのである。

と述べている。このような考え方は、対自を状況内存在として捉えながらも、その状況の内に対自の自由を考えるサルトルの哲学と通じている。

派生的な事柄だが、サルトルと共通する吉本理論の側面は、吉本理論が時枝誠記の理論と通じる側面と重なって行くように思われる。言うまでもなく、サルトルの哲学は現象学を土台にしているが、時枝理論も、根来司氏や森岡健二氏<sup>5)</sup>などによってフッサールの現象学の撰取があきらかにされている。そうであるならば、サルトルの哲学と吉本理論との共通性は、フッサールを介しての時枝誠記の国語理論との関係ということからも、言うことができる。

もちろん、吉本隆明とサルトルとの間には相違する面もあり、また共通するところも今述べたことに限らないが、その問題は後述することにして、次にマルクス理論との関係について見てみたい。

自己表出は「現実離脱の水準」を持ち、価値と関わりとされていたが、それでは自己表出の価値とはどのようなものなのか、また、それはどのような、いわば法則性を持つ

ものなのか、という問題については、吉本隆明の理論は今度はマルクス理論と結びつくように思われる。

吉本隆明は、「言語の属性」のところで、マルクスならば言語の価値を商品の価値について述べたと同じように、指示表出価値と自己表出価値との二重性であらわすであろう、ということ述べ、つづけて次のように語っている。

じじつ、指示表出からみられた言語の関係は、それがどれだけ云わんとする対象を鮮明に指示しえているかということの有用性ではかることができるが、自己表出からみられた言語の関係は、自己表出力という抽象的な、しかし、意識発生いらいの連続的転化の性質をもつ等質な歴史的現存性の力を想定するほかはないのである。

「有用性」「抽象的」という言葉からも「資本論」との関係が窺われるが、雑誌連載時ではつきりと次のように述べている。

マルクスならば、わたしがここで径路として図示した言語の△価値▽を、あたかも商品の価値について述べたとおなじように指示表出価値(使用価値に相当するものとして)と自己表出価値(交換価値に相当するものとして)との二重性をあらわすと云うところかもしれない。<sup>6)</sup>

しかし、このアナロジーは、すでに管孝行氏の批判<sup>7)</sup>にあ

るように、ふさわしいものとは言えない。自己表出価値は言語の芸術性をなうものである以上、それは、交換不能な、それ自体としての独自性を持つものであって、交換価値、あるいはそれを生み出す抽象的人間労働という、量的に換算され交換されうるものと結びつけるのは、おかしいからである。交換不能なものとしての言語の芸術性ということに目をむけるならば、むしろ、使用価値にむすびつけべきである。

それはともかくも、吉本隆明の理論をおっていくと、このアナロジは、『言葉という思想』の中の「幻想論の根底」でもしめされ、また、『ハイ・イメージ論』の中の「拡張論」においても語られている。「拡張論」では、価値形態論と関わらせて次のように述べられている。

マルクスの価値論のうち、わたしたちの目指した領域（言語の形態としての文学（芸術））に対応を暗示されるのは、強いていえば等価の普遍形態としての貨幣が、資本に転化する過程を論じた個所であった。<sup>8)</sup>

吉本隆明は、さらに「G（貨幣）——W（商品）——G（貨幣）」の過程で、GすなわちG+ΔG（剰余価値）のΔG（剰余価値）部分に言語表現の芸術性に対応するものを見ている。

おそらく言語芸術が言語の有用性（使用価値）ではなく、言語の芸術性それ自体を求めるところから、吉本隆

明には、『資本論』の「貨幣の資本への転化」の章、つまり商品の有用性（使用価値）ではなく、価値（交換価値）の増殖それ自体を目指す貨幣の運動の章が、アナロジをなすものに見えたのであろう。しかし、この問題をめぐっての吉本隆明の論述を読むと、このアナロジは不適切に思われる。アナロジを求めるならば、言語の価値（芸術性）の増殖過程についての論理は、むしろ特別剰余価値生産の論理と対応していると言うべきであらう。

たとえば、吉本隆明は、『ハイ・イメージ論』で次のように述べている。

言語の表現の場合、価値増殖はどうあらわれるか、単なる例で指定できる。

- (1)彼の眼は真赤だった。
- (2)彼の眼は兎の（眼の）のように真赤だった。
- (3)彼の眼は兎（の眼）だった。

（中略）

この場合、(1)の文章よりも(2)と(3)の文章は、価値の増殖を付加されているとみなされる。

つまり、(1)のような通常の表現との差異（この場合は比喩だが）に価値の増殖を見ているのである。このことは、『ハイ・イメージ論』では次のように述べられている。

じつはここまできてマルクスが考えた普遍的な等価形態である貨幣の資本へ転化する循環の無限の衝動

に、いちばんよく似ているのは、言語の自己表出の無限の衝動、いかえればより高い自己表出の絶えまない波形である文学（芸術）の表現の衝動であることが知られよう。なぜ言語の等価形態である自己表出を、いつも緊迫してより高度であるような形態で表現しなければならぬのか。ほんとは誰にもわからないのかもしれないが、それにもかかわらず通常の文脈に必要な自己表出を超えた余剰分（ $\Delta G$ ）を生みだそうとし、その超えた部分によってのみ、皮肉にも文学（芸術）と呼ばれるようになる領域に入つてゆく。

注意したいのは、通常の文脈に必要な表現を超えた余剰部分、通常の表現との差異部分に芸術性を見ていること、さらにそれを剰余価値（ $\Delta G$ ）に結びつけていることである。そして、それは、「より高い自己表出の絶えまない波形である文学（芸術）の表現の衝動」によって生み出される、とされていることである。この考え方は、やはり特別剰余価値の生産の論理と対応していると思われる。

よく知られているように、マルクスは、剰余価値の生産について、労働時間の絶対量を増やすことで得られる絶対的剰余価値に対して、労働者が彼の労働力を再生産するのに必要な価値を生み出す必要労働時間を全労働時間の中で相対的に短縮することによって得られる価値を相対的剰余

価値と呼んだ。言い換えれば、労働者にとっては只働きの時間が相対的に延ばされることによって生ずる剰余価値のことだが、この相対的剰余価値の生産の中で、とくにマルクスは、他の平均的な一般の資本家よりも改良された生産方法を持つ資本家が得る剰余価値について述べている。マルクスによれば、その資本家は、ある量の商品を、社会的に平均的な生産条件における場合よりも、より少ない労働時間（すなわち、より少ないコスト）で生産させることができ、しかも、それを販売するときは社会的に平均的な商品価値で売ることができるため、その差額を特別剰余価値として得ることができる。もちろん、この特別剰余価値は、多くの場合、新技術の導入などによって得られるわけだから、その新たな生産方法が普及するにつれて消滅していく。この過程は、ちょうど芸術の言語が通常の言語になつていく過程とアナロジーがあるが、マルクスによれば、通常の商品価値との差額である特別剰余価値の獲得を目指して、各資本家は絶えず生産方法の改善を行い、結果として相対的剰余価値の生産が社会的に推進されていく。

このように見えてくると、通常の表現を超え出ようとする「言語の自己表出の無限の衝動」とは、通常の生産条件を絶えず超え出て特別剰余価値を得ようとする資本の運動と対応しているだろう。さらに吉本隆明は、「美である文学」をマルクスの言う「人間の本質力が対象的に展開された富」

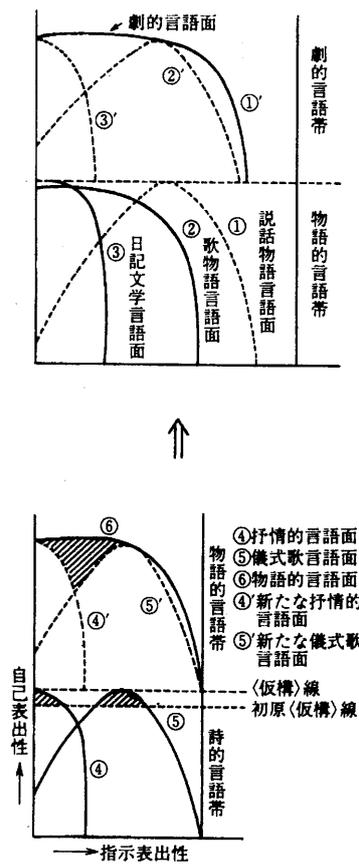
のひとつとして考えられるという立場から、ある時代の言語水準には、各時代とともに変化し亡びる側面と「意識発生らしい意識体験の蓄積という面」があるとして、たとえば古典文学について、それらが今なお現代の我々に感動を与えるのは、その「価値が、意識発生らしいの累積としての連続性をもつ意識の自己表出にかかり、しかもその強さにかかわる側面をもつからである。」と述べている。

「意識体験の蓄積」「累積」として言語表現の発展を考えているわけだが、これは、特別剰余価値を獲得しようとする各資本の競争を通じて、結果として社会全体の資本が有機的構成度を高めて生産力を発展させていく資本蓄積の論理とも対応してくるのである。

この「自己表出力」の「蓄積」は、資本主義社会の資本蓄積運動と対応するだけでなく、「意識発生らしい意識体験の蓄積」というように資本主義社会の資本蓄積を超えて、広く生産力一般の高まり、高度化の論理とも重なってくると思われる。『言語にとって美とはなにか』の中の「構成論」の論理構造は、この観点から見る事ができる。

「構成論」は、詩——物語——劇の推移をその構成面から論じたものだが、吉本隆明は次のように要約述べている。詩の表出としてもっとも高度な抒情詩では、人間の内的な世界のうごきをえがくことができるようになった。物語の表出では、複数の登場人物の関係と動きを

語る事ができるようになった。劇においては、登場人物の関係と動きは語られるのではなく、あたかも自ら語り、自ら動き、自ら関係することができるようになったのである。「構成論」の内容は、このように簡明なものではなく、もっと複雑であるが、「構成論」の論理の特徴は次の図によく頭れている。



論理の特徴は、「 $\wedge$ 仮構 $\vee$ 線」が自己表出軸にそっていわばグレイドアップしていくところにある。そのことを吉本隆明は、たとえば詩から物語への推移について、次のようにのべている。

もはや、詩的な時代が、発生の原像をたもっているかぎりには、それ以上に登りつめることができない自己表出にまでたつたとき、その自己表出の時代的な頂き

を、△仮構▽の底辺とするあらたな言語帯への転化へむかつて、必然的に△飛躍▽せざるをえなかったのである。

このようにして、詩から物語、物語から劇へと「△仮構▽線」が自己表出軸にそって上昇していくとされているわけだが、単純に考えても詩より物語、物語より劇のほうが、△仮構▽性あるいは虚構性の度合いが高まってくると言えよう。しかし、ここで注意したいのは、自己表出力を、交換価値を生む人間の抽象的な労働力、つまりは生産力の高度化を担う力という考え方で見ると、この自己表出力の「累積」によってひきおこされるとされている文学様式の変化の論理は、ちようどマルクスが『経済学批判』の序文や『資本制に先行する諸形態』などで述べた論理に対応している。すなわち、生産諸力が発展して生産諸関係がその生産諸力にとって十分な広さを持たなくなると、新しいより高い生産諸関係へと移行するという論理に対応しているのである。マルクスは、資本制に先行する諸形態として、アジア的、古代的、封建的という生産様式を述べているが、これを『言語にとって美とはなにか』にあてはめてみると、詩の時期が（万葉の時代であるから）アジア的生产様式の時代に、物語の時期が（奈良から平安にかけての時代であるから）古代的生产様式の時代に、そして劇の時期が（室町から江戸にかけてであるから）封建的生产様式の時代に相当する。

もちろん、この時代的な符号そのものにはあまり意味はないが、自己表出を交換価値に、自己表出力を人間の抽象的な生産力に対応させて、そのアナロジーを基底に据えて文学様式の発達史について論理をすすめていけば、必然的に、生産力発達によってもたらされる生産様式発展の論理と類似性を帯びてこざるをえないと言えるだろう。

### 三

以上のように、『言語にとって美とはなにか』の論理が、言語が現実離脱の水準を持つと同時に状況とも関わりとする点においてサルトルの哲学（『存在と無』の哲学）と共通し、また、言語の自己表出の累積の法則性については、今度はマルクスの理論と類似することを見てきたが、先に述べたように共通する面だけではなく、それらの理論と相違するところもある。

まず、サルトルに関して見ていくと、「想像力派の批判」（昭35・12）の中で、吉本隆明は、マルクスの『経済学、哲学手稿』や『ドイツ・イデオロギー』にしめされた芸術にたいする理解の断片は、いわゆるマルクス主義芸術論のなかにはなく、「かえってサルトルのなかに倒転した像のあたりでいきている。」と評価しつつも、それは「倒転」しているとして述べている。このことに触れて吉本隆明は、「サルトルが人間は先験的に自由だから想像力は可能なのだ、

というさか立ちした理解にたっした」(同)と述べ、また、「じじつイメージは、人間が社会的疎外を意識の対応物として措定できるところでしか可能ではないはずである。」(同)とも語っている。つまり、想像力は社会的疎外に対応しているのだが、疎外概念が欠如している『存在と無』のサルトルは、想像力を人間に先天的に備わったものと捉えてしまっている、というわけである。想像力の問題について、吉本隆明は同様のことを『言語にとって美とはなにか』でも語っている。

しかし、くりかえしていえば、芸術的な表現が自由な序列をもちうるということは、ただちに想像がまったく自由であるということの意味しない。すくなくとも、現実の社会で諸個人が存在する根拠や理由が不確かさもつたとき、その部分に対応するある球面への想像が自由になるものとかんがえられる。

想像力の問題を疎外の問題と関連させて考えるか否かが、吉本隆明とサルトルとの相違である。この相違は、状況を、『存在と無』のサルトルが「私の場所」、「私の過去」、「私の環境」、「私の隣人」、「私の死」というふうに抽象的なレベルで考えているのに対して、吉本隆明は、具体的な歴史社会のレベルで考えようとしていることとの相違であるとも言えよう。

さて、次にマルクスとの相違についてであるが、この問

題は、『存在と無』のサルトルにはなく吉本隆明にはあった疎外概念に関わってくる。周知のように、外化、疎外の論理は、ある存在が自己の内にある本質を外化し、その外化されたものが自己にとってよそよそしいもの、自己に對立するものになることを言う。吉本隆明の場合、そのような論理を語ることもあるが、多くの場合、とくに言語の問題に関しては、少し違った論理展開になっていると思われる。言語論における吉本隆明の疎外論理は、まず、非同一性が最初にあり、それについての対立、違和の意識が言語表現を生むという構造である。『言語にとって美とはなにか』では次のように述べられている。

言語は、動物的な段階では現実的な反射であり、その反射がしだいに意識のさわりを含むようになり、それが発達して自己表出として指示性をもつようになつたとき、はじめて言語とよばれるべき条件を獲取した。

(傍点・原文)

対立、違和の意識である「意識のさわり」は、「しこり」とも言われて、感覚的な言葉で表現されているが、言語表現は、この対立、違和に対する反応であり、同時にそれらの解消、あるいは克服の志向も含んだものとしてある、とされている。このことは、『言語にとって美とはなにか』と同時期に書かれた『マルクス紀行』(昭39・7)の中でも、「わたしの△表象▽あるいは△表出▽という言葉は、△疎

外√すなわち△疎外√の止揚の欲求を意味している。」(傍点・原文)、また、「△表象√あるいは△表出√あるいは△疎外√は、すなわち△表象√あるいは△表出√あるいは△疎外√を打消す反作用である。」(傍点・原文) というふうに述べられている。つまり、ヘーゲルや(初期)マルクスの場合には、同一性<sup>①</sup>——非同一性——同一性という展開となり、①のところは外化、疎外の過程があるが、吉本隆明の場合には、非同一性<sup>②</sup>——同一性という展開で②のところは外化、疎外のポイントがあることになるのである。外化という言葉の用い方について見れば、『言語にとつて美とはなにか』の中で「ヘーゲルの観念の弁証法」を「主観が客観と対立し、その対立が人間の存在をおびやかす、この対立を止揚しようとする傾向性のうちに外化されるという弁証法」というふうに述べているが、ここでも「外化」は「対立を止揚」する過程と結びつけられているのである。

このようにヘーゲル、マルクスには、同一性から非同一性へ、さらに止揚されて同一性へと展開されていく動的な過程の論理があるが、吉本隆明にはそれがないのである。このことは、吉本隆明がヘーゲルやマルクスの疎外論にはしばしば言及しながら、彼らの弁証法にはほとんど言及しないことと関係していると思われる。

#### 四

疎外論をめぐる吉本隆明の考え方は、『存在と無』のサルトル、そしてマルクスと以上のような相違があるわけだが、大きな観点から見れば、『言語にとつて美とはなにか』は、サルトル的な考え方とマルクスの理論との融合によって成り立っていると言ふことができよう。ここではサルトルとの共通点(この場合は『弁証法的理性批判』のサルトルだが)についてさらに述べてみたい。『言語にとつて美とはなにか』に次のような一節がある。

そして、芸術の内容とか形式とかが、直接土台を反映するのではなくて、この△かささぎのわたせる橋√(自己表出)を介してしか、現実を反映したり、とりこんだりしないということは、ルカーチの理解の外におかれるのである。

この「△かささぎのわたせる橋√」とは、よく知られているように、七夕に牽牛と織姫が天の川で会う時にかささぎが翼で天の川にかけられる橋のことで、要するに現実や土台は直接に反映されるのではない、と吉本隆明は語っているのである。しかし、このことは逆に言えば、現実が直接的にはないにしても、自己表出という△橋√を介して映しだされることになり、これは、状況から自立しつとも状況を映しだしているという論理になってくる。柄谷行人氏はそ

ここに着目して、吉本隆明の論理はライプニッツのモナドロ  
ジーと対応していると述べているが、ここではその問題で  
はなく、『言語にとつて美とはなにか』を離れることにな  
るが、状況、全体を把握しようとする論理において、吉本  
隆明とサルトルとが共通していることを見ていきたい。

吉本隆明は、『世界認識の方法』（昭55・6）で歴史は偶  
然か必然かという問題について「偶然の積み重なりがどこ  
かでその必然に転化していくその境界と範囲が確定され  
る」という考え方にまだ期待を持っていいのではないかと  
いうことを語り、次のように述べている。

そこまで煮つめたところで、歴史を動かすのは主体  
の意志の総和であるかもしれない。また個人を超えた  
共同の、ある国家とか民族、階級、そういうものの総  
和の意志がある度合で歴史を動かす要素かもしれな  
い。そういう考え方自体は、いまでも固執したいとこ  
ろです。

そして吉本隆明は、注の中でエンゲルスの「フォイエ  
ルバツハとドイツ古典哲学の終結」の「歴史の領域における  
無数の個人意志並びに個人行為の衝突は、無意識的自然界  
を支配している状態と全然類似した状態を現出する。(略)  
表面の上では偶然が作用している場合でも、つねにこの偶  
然は、内部に隠れている法則によって支配されているので  
ある。」という一節を引用しながら、この一節には、

無数の個人の意志や意欲のベクトルの総体は、統計  
的に無意欲あるいは無意志の状態と一致するというこ  
とがひとつ。無数の個人の意志や意欲による行為は総  
体的な観点(つまり歴史としての観点)からはつねに意  
志や意欲のベクトルとは異なった、またはそのベクト  
ルの方向性に反するように実現されてしまうことがひ  
とつ。

ということが語られているとして、「まったく偶然が支配  
しているようにみえる表層と、この偶然を支配しているよ  
うに内部に隠れている法則というエンゲルスの発想は、解  
答可能かどうかとかかわりなく魅力的である。」というふ  
うに肯定的に述べている。

このエンゲルスの考え方に関しては、「フォイエ  
ルバツハとドイツ古典哲学の終結」をあげるのでなく、「エンゲ  
ルスからブロッホへの手紙」をあげるのが普通であるが、  
その中でエンゲルスは、歴史は多くの「個別意志」の葛藤  
の中から最終結果としてつくられるのである、として次の  
ように述べている。

つまり無数の、たがいに阻害しあう力、すなわち力の  
平行四辺形の無限の集まりがあり、そのなかからひと  
つの合成力——歴史的结果——が生まれるのであり、  
それ自身はまた全体として無意識に、また無意志には  
たらく力の産物としてみなすことができるのです。<sup>10)</sup>

この無数の「個別意志」のベクトルの総和である「合合力」の論理は、サルトルにも見られるのである。

そのことを指摘したのはルイ・アルチュセールである。アルチュセールは、『甦るマルクス』の中で、サルトルがエンゲルスの議論に異議申し立てをしているにしても、根本においてエンゲルスの試みを認めていると述べ、それを知るためには『弁証法的理性批判』の数ページを読めばよいと語っている<sup>(91)</sup>。たしかにアルチュセールが指摘している個所には、エンゲルスの理論に通じる内容が語られ、しかも「投企がお互いに顔を合わせた合力」(傍点・原文)という言葉が見られるのである。「投企」を「個別意志」に、「お互いに顔を合わせた合力」を「力の平行四辺形の無限の集まり」の「合合力」に置き換えてやれば、サルトルの論理はエンゲルスの論理と重なるのである。

吉本隆明もサルトルも、ともにエンゲルスに対して手厳しく、にもかかわらず、根本的な発想においてエンゲルスの考えに同化してしまうところが似ていると言えるが、このように個人の投企、主体の自由意志を認めつつ、一方で歴史の必然性をも認めようとするれば、エンゲルスの理論とならざるをえないと言えるかも知れない。さらに言えば、エンゲルスの理論から自然科学的なニュアンスを抜き取り、一種の統計的必然をあらわす「合力」という言葉のかわりに「理性の狡知」を置き換えると、これはヘーゲルの

論理に通じてくるのである。『世界認識の方法』の中で吉本隆明が、世界の総体的認識という考え方に固執したいと述べ、全体性の認識という問題についてはヘーゲルの哲学にこだわりたいと強調していることも、今述べた意味で頷ける。

『言語にとって美とはなにか』においても、このような志向性が貫かれていると言えよう。もちろん、「合力」の理論が直接述べられているわけではないが、自己表出という概念によって個人の自由意志を認めつつ、同時に「構成論」に見られるように、それら個々人が生み出す一種の法則性への志向性を合わせ持つならば、つきつめていけば合力の理論に行き着くような特質を持った著作だったと言えることができよう。

さて、以上のように見てくると、『言語にとって美とはなにか』は、サルトル的な考え方とマルクスの理論との融合によって成り立っている理論書であると性格づけることができよう。あるいは、その融合をひとつのモチーフにしている理論書だと言えるかも知れない。その意味でこれは、広松渉氏流に言えばマルクスの時代の産物とも言えよう。しかし、その融合は成功しているとは言いがたい。そのことは、すでに指摘したように、たとえば、『存在と無』の中の「欠如を蒙る全体」という場合の「全体」概念を「言

語の全体」の「全体」概念に無造作に結びついたり、また、自己表出概念をはたして交換価値概念に結びつけてもよいものかどうかという問題に対して精密な考察が欠けていたり、さらに、『ハイ・イメージ論』に見られたように『資本論』とのアナロジーが不適切であったりするなど、重要な理論的部分での概念操作が粗雑で恣意的なものとなっていることと関係している。したがって、この書で述べられた理論は、吉本隆明が目指した普遍理論とはなりえず、吉本隆明以外には応用不可能なものに終わっている。

その他、この理論書に対しては、発表当時から、たとえば、そこには読者論が欠落しているという指摘、また、時枝誠記氏からは吉本隆明が詞辞を連続的に捉えていることの批判があった。今日から見ればその物語論が抽象的であるという批判も可能であろう。

しかし、右に述べたような批判とともに、『言語にとつて美とはなにか』が壮大な試みであったという評価はできらるであろう。これは、まさしくマルクの時代の理論的記念碑である。理論的有効性は持ち得ないが、あの時代の思想の動向を、混乱を内に含みながらも包括的に映しだしている理論書だと言えよう。同時に吉本隆明の発想の資質をよく現している著作だとも言える。

この書物に対して、その理論的欠陥部分を指摘して事足りりとするのではなく、真に理論的に乗り越えようとする

なら、「合力」の理論に帰着してしまふような考え方そのものに疑いの目を向ける必要があるだろう。すなわち、まず、歴史の法則性という考え方に疑いを投げ掛けるとともに、主体の自由という考え方にも懐疑的でなければならぬであろう。それは、言うまでもなく、マルクス主義と実存主義に対する生産的な批判という課題ともつながっている。

注(1) 『言語にとつて美とは何か』(昭40・5、40・10)。ただし本文の引用は『吉本隆明全著作集6 文学論Ⅲ』(昭47・2、勁草書房)による。また、本文中の引用でとくに注記のないものは、すべてこの書からの引用である。

(2) 『意味の意味』(石橋幸太郎訳、昭42・9、新泉社)。

(3) 『存在と無』(松浪信三郎訳)でサルトルは、この全体について「かかる全体は、(略)それが世界のかなたに超越者として実体化される場合に神という名を得る」と述べている。

(4) 『方法の問題』(平井啓之訳、昭37・7、人文書院)。

(5) 根来司「時枝誠記博士の国語学——現象学とどう関わりどう関わらないか」(『国語と国文学』一九八三・8)、森岡健二「『文法の記述』(一九八八・2、明治書院)。

(6) 「試行」(昭37・9)。

(7) 菅孝行「言語観の転位は成就されたか」(『流動』昭53・3)。

(8) 『ハイ・イメージ論』(一九九〇・4、福武書店)。

(9) 柄谷行人「ライブニッツ症候群——吉本隆明論」(「季刊思潮2」一九八八・10)。

(10) 「エンゲルスからヨーゼフ・プロッホへの書簡」(下村由一訳)。

(11) アルチュセールは、「たといサルトルがエンゲルスの答とその議論に異議を申し立てているとしても、サルトルが根本においてエンゲルスの試みそのものを認めていることを知るためには、『弁証法的理性批判』の幾ページか(略)を参照しさえすればよい。」(河野健二・田村俣訳、人文書院)と述べている。

〔付記〕 この論文は、一九九〇年度日本近代文学会春季大会での発表をまとめたものである。

〔フートルダム清心女子大学〕